

## 特集：座談会

伊地知義信

IJICHI YOSHINOBU  
(東京都豊島区立西巣鴨中学校)

金井 睦

KANAI MUTSUMI  
(栃木県栃木市立栃木南中学校)

関口和弘

SEKIGUCHI KAZUHIRO  
(神奈川県横浜市立大正中学校)

高梨庸雄

TAKANASHI TSUNEO  
(京都ノートルダム女子大学)

高橋貞雄(司会)

TAKAHASHI SADAO  
(玉川大学)

## 少人数授業を考える

高橋 本日の座談会では「少人数授業を考える」というテーマのもと、先生方からお話を伺います。英語教育界における改革が進んでおりますが、その取り組みのひとつとして「少人数授業」が多くの学校で実施されています。1クラスの生徒数という観点から国際比

較をしてみると、日本におけるクラス・サイズは欧米に比べ「倍くらいである」と言われています。この点から考えると、少人数授業が行われ始めたことは、一般論としてはよいことのように思えます。しかし、実際はどのようなのでしょうか。少人数授業が導入されるに

至った背景にはどんな状況があったのか、また導入の結果として、授業における何が改善されたのかを検証することが大切だと思います。さらに、そこに新たな問題が起きているのであれば、それについても把握しておく必要があるでしょう。

### 少人数指導導入の経緯

高橋 それでは、まず導入に至る経緯についてのお話から伺いたいと思います。

高梨 小渕内閣のときに「教育改革国民会議」がスタートしました。この会議で審議され、まとめられた内容が7つあったため、虹の7色にたとえて「レインボープラン(7つの重点戦略)」という名前がつけられました。その7つのうち1つめが「わかる授業で基礎学力の向上を図ります」という内容であり、その中に「基本的教科における20人授業、習熟度別授業の実現」という文言が入っていました。これがそもそもの少人数指導

の始まりであったと言えます。もちろん、厳密には「少人数指導」と「習熟度別指導」とはイコールではありません。ただ、習熟度別指導を実現する具体的な手だてとしては、少人数指導があるわけですから、その意味で同意語的に使われることもあるようです。

「レインボープラン」は、出された当初はあまり大きな話題になりませんでした。ところがその後、新学習指導要領(平成10年)が、教科によっては「この内容では不十分」と批判され、文部科学大臣が指導要領の位置付けについて「最低限度を規定したもの」であ

ると発言しました。平成15年度には学習指導要領の一部改正もあり、より習熟度別指導がしやすい形となりました。該当箇所を引用すると、「各教科等の指導に当たっては、生徒が学習内容を確実に身につけることができるよう、学校や生徒の実態に応じ、個別指導やグループ別指導、繰り返し指導、学習内容の習熟の程度に応じた指導、生徒の興味・関心等に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れた指導」という表現が使われています。また、指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項として

「個に応じた指導の充実」というスローガンも挙げられています。このような指導要領上の変更があったことで、少人数指導が脚光を浴びることとなりました。

もうひとつの原因は、教員の配置計画の変更、つまり「加配」です。各教育委員会では、加配という制度ができたからには「(先生を)もらわなければ損だ」という発想のところも多かったようで、それによって少人数指導が瞬間に全国に広まったという側面もあったようです。

少人数指導の導入に伴って、いくつかの問題点も出てきました。1つめは、いつ、どの教科を少人数でやるかという「年間指導計画」

の問題。2つめは、どのような原則に基づいて生徒を少人数に分けるのかという「分け方」の問題。必ずしも成績に応じて分ける必要はないのですが、実際には習熟度別にしている例が多いようです。3つめは、教材の問題。いくつもの習熟度別グループがあれば、それぞれの集団に応じた教材を教師が用意する必要があります。4つめは、少人数に分けた場合、評価をどうするかということ。使う教材が違ったり、扱い方が違っている場合、その評価のものさしはどうするのか、ということです。5つめは、学校内の体制の問題。一般的には、ある学年の英語の授業をすべて同じ時間帯に集めて、

複数の教員が同時に少人数で授業を展開するということが行われます。つまり、誰がどのクラスを担当するのか、時間割をどうするのかという点が、より複雑になるわけです。6つめは、これが最後になりますが、保護者や学校外の方に対する説明の問題です。日本では戦後、教育は「平等」ということを旨としてきた経緯があります。このような流れの中で、成績別に生徒を分けることが「不平等である」というかなり厳しい批判がありました。このような経緯をふまえると、習熟度別指導を実施するにあたっては、かなり丁寧な説明が求められるでしょう。

## 各地域の実施状況

**高橋** ではここで、先生方の地域、あるいは学校における少人数授業への取り組みについて、概略をお聞きしたいと思います。

**金井** 本校では、去年と今年、学力向上フロンティア校の指定を受けて研究をしていますが、その前年にあたる一昨年、ちょうど少人数指導が注目を集め始めた頃に、初めて少人数指導を取り入れました。2年生の2クラスを合わせて、名簿の順に3グループに分けるという方式でした。

やってみると、確かに教員にとっては、事務的な面などでいいこともありました。テストや提出物の添削指導にしても、生徒数が少ない分、時間は短くなります。しかし、それが実際に学習効果を高めているのかどうかの判断をす

るのは難しいと思いました。

いくつかの問題点もありました。まず、生徒指導上の問題を抱える生徒が複数いるグループでは、授業に集中しない生徒が増えたようでした。また、それぞれのグループの担当教員を固定したのですが、それによってグループ間の指導に差が出てきてしまったということもありました。これが一昨年の取り組みです。

去年、フロンティア校の指定を受けたので、再挑戦のチャンスであると考え、今度はやり方を少し変えてみようということになりました。検討の結果、現在の授業形態として最も多いのはT-T (Team-Teaching) です。ただ、習熟度別の指導もうまく取り入れれば効果があるだろうということ

で、場面に応じて随時行うようにし

ています。基本的には、生徒間に習熟度の差が出たときに、その差を埋めるための方策という発想で少人数指導を取り入れています。

**関口** 横浜市では、一昨年の調査で、84%の中学校で少人数指導が実施されていることが分かりました(平成14年度横浜市教育委員会調査)。実施教科のほとんどが数学と英語です。加配人員の関係で、全学年で少人数指導を行うことはできませんので、各学校の生徒の実態に応じて、学年を選んで実施することになります。

本校では昨年、3年生で実施を始めました。主なねらいは、進路を見据えた基礎学力の定着です。各クラスを2つのグループに分



IJICHI  
YOSHINOBU



KANAI  
MUTSUMI



SEKIGUCHI  
KAZUHIRO



TAKAMASHI  
TSUNEKO



TAKAHASHI  
SADAO

け、各グループの生徒数は17～18名でした。担当教員は学期の途中で入れ替え、また生徒集団も編成を変えました。最初は出席番号の前半と後半を単純に分割し、後期には番号の奇数と偶数で分けました。全般に、昨年度の取り組みは生徒たちにも評判がよく、教員側にとっても一人ひとりの生徒に余裕を持って目を行き届かせることができたという評判でした。

昨年度の成功を受けて、今年は1年生で少人数指導を実施しています。クラス分割の方式は、昨年と同様、習熟度別ではなく、均等割です。1年生を選んだ理由は、英語の学習にとってはスタートの時期が最も大切だと考えたからです。1年生のうちにたくさんの言語活動を経験し、多くのインプットとアウトプットの機会を与えることで、基礎学力が定着するのではないかと思います。今はその結果を楽しみにしているところです。

**伊地知** 東京都では、数年前から



**伊地知 義信**

東京都豊島区立西巣鴨中学校教諭。ELEC 同友会英語教育学会実践研究部員。英語教育にとどまらない学習指導と能力開発に興味を持っている。できるだけ多くの生徒が英語を好きになって卒業できることを目標としている。

3校ほどのパイロット校で英語・数学を中心に少人数授業の取り組みを始めました。当初均等割でクラス分けをした学校もあったのですが、都から要請があり、2年度めは習熟度別にしたようです。基本的には2クラスを3グループに分ける形でした。

豊島区には中学校が10校ありますが、このうち2校が東京都の方式を導入しており、そのほかに数校が豊島区の方式を導入しています。豊島区の方式とは、学校が希望する教科について、区が独自に講師を採用するというもので、本校ではこの方式に従って、英語・数学・理科の3教科について講師の方に来ていただいています。

豊島区の方式では、各クラスに専任教員1名と講師1名がつくので、クラスを2グループに分けて少人数指導をしてもよいし、または分割せずにT-Tをしてもよいことになっています。本校では、習熟度別の少人数を基本としながら、状況に応じてT-Tによる一斉授業も取り入れています。スピーチの発表やコンピュータを使った授業などには、一斉授業のほうが向いているようです。

1年生の入門期に限っては、まだ習熟度に差がないので、生徒を均等割し、「聞く・話す」を中心とする6時間を担当する教員と、「アルファベット・書く」を中心とする6時間を担当する教員が、3時間交代で両方のグループの授業を行いました。

その後は「習熟度別」になるわけですが、分ける際の最終決定は生徒の希望によります。教員から

はアドバイスやカウンセリングはしますが、最終的には生徒の希望を尊重します。よって、英検3級取得者が基礎のグループにいることもあります。この生徒たちは中国籍のため、発展コースに不安があるようです。

**高橋** 先生方のお話を伺う限り、各学校の実態や子どもたちの実態に合わせて柔軟に実施方法を調整しているようで、ある意味ではまだ確立したフレームワークはないという印象を受けました。

**高梨** 関口先生の実践例に、担当教員も生徒集団も途中で入れ替えがあるということがありましたが、これは非常によいことだと思います。関口先生の場合は出席番号による分割とのことでしたが、習熟度別の場合にも同じことが言えます。生徒集団が途中で入れ替え可能ということであれば、生徒としては、全体の中での自分の位置付けを自分なりに把握し、あるいは教師から伝えられ、それに基づいた目標設定ができます。つまり、その目標がクリアできれば上のクラスに行けるという具体的な目標です。こうした見通しがたてば、生徒のモチベーションも高まるでしょう。担当教師の入れ替えについても、よい発想だと思います。実は以前に調べた実践報告に実際にあったのですが、生徒の中には、教員との相性のようなものを重要視する者もおりますから、少人数編成になる前の担当教員の方がよかったとか、以前の先生のように指導してほしいというコメントが出るようなこともあったようです。もちろん、そのこと自体

少人数授業を考える

が少人数制の是非を決めるということではありませんが、担当教師の入れ替えという工夫はよいと思います。

栃木では、担当教員を固定したためにグループ間の指導に差が出てしまったとのことでしたが、これはある意味では当然のことだとも言えます。教員にはそれぞれに個性もあれば経験の違いもあるわけですから。この差をどう埋めて、どこで統一をとるか、ということだと思います。その上で重要になってくるのが、生徒の伸び具合

がよく分かるような指導計画を立てるといことでしょうか。いわゆる、「総括的評価」に対する「形成的評価」、つまり他の生徒との比較ではなく、以前の自分と比べて、頑張った成果がどう表れているのかということがわかるような評価というものがある、あるいは成績についての教師からのわかりやすい説明が、求められるということになると思います。形成的な分析に基づいた、きめこまかな指導計画が必要となるでしょう。

もう一点、豊島区の報告に、英

語・数学が中心だというお話がありました。これは他の地区でもだいたい同様だと思います。なぜかという、英語と数学は学力差が出やすい教科であり、学年が進むにつれてその差も開く傾向があるからでしょう。また、理科・社会・国語に比べ、英語・数学は、知識や技能を中心に考えればの話ですが、比較的短期間でも効果が表れやすい、ということもあるでしょう。限られた授業数の中でも指導の結果がわかりやすいということで、英語と数学が選ばれることが

習熟度別か，均等割か

**高橋** 少人数指導をする上で、生徒の分け方や担当教員の配置には、多様な例があるようですので、ここで整理したいと思います。まず、生徒を単純に均等割する方式と、習熟度別に分割する方式。それぞれにメリットとデメリットがあるかと思います。また、教える側としては、クラスを分割せず複数名教員がT-Tをする方式と、分割してひとりで担当する方式がありました。それぞれの方式について、どんなお考えをお持ちでしょうか。

**関口** 本校では、出席番号を使って分けていますので、均等割ということになります。いきなり習熟度別を取り入れることには、やはり不安があります。能力的に差をつけられたという差別意識のようなものを、生徒本人や保護者が感じないかということが心配です。それが習熟度別に踏み切っていない理由のひとつです。

もうひとつの理由は、英語科の授業の大きな役割のひとつとして、「生徒同士の深い関わりを作る」ということがあると考えているからです。今、なかなか他者との関わりを持っていないという生徒が増えています。そんな中、英語の授業は、活動を通して生徒同士が親しくなれる、お互いを理解できる素晴らしい機会ではないかと考えています。そう考えると、いろいろなタイプの生徒が一緒に存在している集団の中で学ばせたい、そんな中から助け合いや学び合い、教え合いも起こってくるのではないかと考えています。これが均等割のメリットであると思います。

**高橋** 英語という教科ならではの特色を生かした編成ということですね。仮に習熟度別を取り入れたとしたら、どうでしょうか。

**関口** 習熟度別のメリットは、「授業がわからない」という気持ちを

持った生徒が、少しでも「わかった」という喜びを感じられることだろうと思います。誤解を恐れずに言えば、習熟度別で「発展」のクラスにいる生徒は、教師からの適切な方向付けがあれば、自分の

PROFILE



**関口和弘**  
 横浜市立大正中学校教諭。平成14年度、横浜市教育センター第一種研究員として、「少人数指導」の研究に取り組んだ。現在、横浜国立大学大学院に内地留学中。主な著書に、『児童英語キーワードハンドブック』（ピアソン・エデュケーション、共著）『中学校英語科の新評価問題づくり』（明治図書、共著）などがある。



IJICHI YOSHINOBU



KANAI MUTSUMI



SEKIGUCHI KAZUHIRO



TAKAMASHI TSUNEKO



TAKAHASHI SADAO

力で伸びていくことができます。大事なのは、「基礎」のクラスの生徒たちが、いかに自信を持ちながら伸びていけるかということだと思います。

ひとつ心配なのは、習熟度別にした場合、教師と生徒との関わりを通して学力が伸びたとしても、生徒同士の学び合いはうまく成立しないのではないかということです。いろいろなタイプの生徒と関われば、その中から自分のモデルとなる生徒を見つけて、そこへ近づこうとして頑張る生徒もいます。また、学力面では不十分でも、素晴らしい個性やアイデアを持った生徒もいて、スキット作りなどの活動で活躍しています。習熟度別で分けたとき、それぞれの個性を生かしたような活動が生まれてくるのかどうか、それも心配です。習熟度別編成には、学力面でのメリットがあると思う反面、そのような心配もあるということです。

**伊地知** 本校では習熟度別編成を2年間実施していますが、習熟度別に踏み切るまでには、半年間ほどいろいろと考えました。というのも、以前はソシオメトリーを使ったペア学習、つまり英語が得意な生徒と不得意な生徒がペアになって学習を進められるような場面を意識して指導をしていたのです。生徒同士が助け合い学習をできるような場面作りですね。そんな時期を経て、少人数授業を始めたので、いろいろと考えました。

習熟度別編成のメリットもいくつかあると思います。そもそも少人数授業では、担当教員の個性に

よって授業に差が出てくるので、均等割で同じ授業を前提とするよりは、習熟度別にして、違う授業を行うことを前提としたほうが現実的だとも言えます。また、語学は習熟度別でやるべきだ、という主張もあるようです。確かに、アメリカなどと違って日本社会には、飛び級や同一学年の再履修のようなことは受け入れられにくい体質があるでしょう。ただ、アンケートの結果などを見ると、(習熟度別編成でも)まあ大丈夫かな、という印象もっています。もちろん、習熟度別とは言っても、選定には本人の希望を入れていますし、入れ替えも多少あります。また下のクラスには、なるべく劣等感を持たせないようにする配慮はしています。いやすい雰囲気を作っているのでは、居心地よく感じている生徒が多いようです。

**高橋** 習熟度別ではあっても、生徒の希望も重視する、やはりそういった対応が必要でしょうか。

**伊地知** 必要だと思います。クラス分けに当たっては、まず教員が案を作り、それをもとに生徒と個別にカウンセリングのような相談を持ちます。だいたい教員の案通りになりますが、違う希望を出す生徒もいます。その場合、それを尊重します。よってクラス分けについての不平も出ません。ただ、3つのレベルを設けるとどうしても真ん中に希望が集まってしまったり、時には30人を超えるクラスになってしまうなど、問題も生じるでしょう。そういった面も含めて、習熟度別がいいのかどうかの検証は、これからも継続的に

行う必要があると思います。

**高橋** 金井先生の学校では、均等割の少人数から始め、今ではT-Tが多いとのことでしたが。

**金井** 一昨年に話を戻しますと、2クラスを合わせて3つに分ける少人数指導をやりました。このときは名簿の順に均等割にしたのですが、先述のとおり、生徒指導上の問題を抱える生徒が同じグループに入ってしまったたり、教員間の指導に差が生じたりなどが目立って、あまり少人数制導入のメリットを感じませんでした。

昨年と今年は、グループ間の差を生じさせないために、T-Tを中心とする取り組みに変えました。結果として、T-Tのメリットをいくつか感じています。例えば、一方の教員が廊下で個別のインタビュー・テストをしながら、もうひとりが教室で残りの生徒を指導することもできます。授業内を行う教師同士のデモンストレーションも、生徒の興味・関心を高め、いい影響を与えているようです。そんな中で折を見て、英語の苦手な生徒に対してのケアが必要なときや、上位の生徒にさらなる満足感を与える発展的な学習をしたいときなどに、習熟度別に分けた少人数授業を随時行っています。

少人数授業を継続的に行うと、生徒の心の中に「あちらのグループでは何をやっているんだろう」という不安や焦りが生まれてくることもあるようです。また、どうしても進度に差が生じます。これらのデメリットを防ぐ上で、現在の取り組みは成功しています。時折はさむ習熟度別授業も、上位の

少人数授業を考える

PROFILE



金井 睦

栃木県栃木市立栃木南中学校教諭。「楽しく、そして充実感が感じられる授業」を目指している。現在、勤務校が文部科学省・栃木県教育委員会から「学力向上フロンティア事業」の指定を受け、授業改善の研究に取り組んでいる。

生徒にとっては自分の実力をのびのびと発揮する場となり、低位の生徒にとっては他の生徒に気兼ねなく、いい意味で開き直って発言できる場となっているようです。これが生徒の充実感につながっています。

高梨 基本的に私は、生徒の希望

を加味した編成が望ましいと考えています。生徒は希望を述べるからには、そこに責任が伴います。また、どのグループに入りたいかを考えることは、自分自身を客観的に見つめ、自分の力を把握することにつながるでしょう。勉強の過程でも、自分なりの目標設定や、そこにどれだけ近づけたかという自己反省を意識できるようになるのではないのでしょうか。

ただ、学校によっては、あるいは地域社会によっては、同じ学年の生徒が能力別に区別されたような印象を持って、これを拒否したがる人たちがいることも否定できないでしょう。

ここでちょっと海外に目を転じてみましょう。日本での習熟度別指導の実践を、海外との比較を通して見直してみると、バランスがとれているという点で、日本の実践は欧米よりも優れていると思います。日本では、全教科にわたっ

て習熟度別指導を実施しているわけではないですから、多様な生徒を含むホームルームというミニ・コミュニティでの人間関係や経験を活用できます。一方、ヨーロッパでは、学校を選択する段階で、生徒が習熟度別に分けられることになり、実質的には将来の進路(track)も決められてしまいます。Tracking Systemと呼ばれるこの制度は、いろいろな調査の結果、どうもそれではうまくいかないということが言われ始めて、欧米では現在再検討に入っています。日本では、原則的にはホームルームという集団のよさを維持しながら、差がつきやすい教科でのみ習熟度別指導を取り入れているということで、バランスがよいと思っています。

高橋 「個を大切に作る教育」が大切であるという示唆をいただいた気がいたします。

少人数授業の実践報告

高橋 少人数制では、どんな授業が実際に行われ、何が教えられているのでしょうか。伊地知先生は、習熟度別少人数授業の実践報告をされているようですが。

伊地知 本校では3学年すべてで、クラスを習熟度別に半分に分けた少人数授業を行っています。私は基礎コースをすべて受け持ち、講師の先生が発展コースを担当しています。

3年生の基礎コースを中心にお話ししますと、やはり不得手な生徒が多いので、深めたり発展させ

たりといった授業はなかなかできません。授業の前半では、基礎力を補充するために、1年生の教科書を使ってディクテーションをさせています。また単語や代名詞の置き換えなどの練習プリントを何度も繰り返し行い、この1年ほどでだんだんと定着してきたという実感があります。教科書をまったく進めないわけにはいきませんので、授業の後半では、3年生の教科書を進めています。教科書については、発展クラスの先生と相談して進度を合わせています。

注意しているのは、極力ポイントを絞って「これだけは覚えてほしい」というのを明確に伝えることです。また、なるべく丁寧に、T-Fテストなども口頭で分からなければ板書をして解説しています。どうしても時間がかかりますので、英作文などは省くこともあります。ただ、例えば修学旅行の報告のライティングなどは、両コースで同時にやらせて、いっしょに発表させました。

高橋 基礎コースでより丁寧な指導、確実に定着ができるように



IJICHI YOSHINOBU



KANAI MUTSUMI



SEKIGUCHI KAZUHIRO



TAKAHASHI TSUNEKO



TAKAHASHI SADAO

なったという点にメリットを感じているということですね。発展コースでは、より高い目標を持ち、より発展的な内容をやるとなると、コース間の格差が広がるということはありませんか。

**伊地知** 確かにペーパーテストでは発展コースのほうが高い点数を取ります。しかし、スピーチをさせたときに、基礎コースの生徒がALTによる評価でオールAを取ったこともありました。本人も大変喜んでいました。山登りにたとえてみると、基礎コースと発展コースは、「同じ頂上を目指しつつ、登り方が違う」ということなのだと思います。ですから基礎コースの生徒にも劣等感はありませんし、どうせ下のクラスだからというような雰囲気もありません。

**高橋** 個に応じた指導を考える上で、山登りにたとえたことばは大変印象的な表現ですね。

## P R O F I L E



高橋 真雄

玉川大学教授。専門は応用言語学・英語教育学。言語習得論、教授方法論、外国語教材論などに特に力を入れている。現在、大学英語教育学会(JACET)の理事としても活躍中。著書に『ロングマン応用言語学用語辞典』(南雲堂)、『外国語の教え方』(玉川大学出版部)ほか。

続いて、均等割方式による少人数指導について伺います。

**関口** 生徒数の減少に伴って教室数に余裕ができましたので、そのひとつを英語教室としてもらいました。クラスを2分割し、半分は自分の教室で、残りの半分は英語教室で授業をするという形になっています。そのほか、ミーティング・ルームという広い教室や視聴覚室なども随時利用しています。

少人数制の利点は、「いかにインタラクティブを増やせるか」ということだと思います。それができなければ、少人数をやる意味がないとすら感じています。私が特に注目しているのは、少人数になったからこそ可能になる教室空間の自由な活用です。生徒が少ないために空いたスペースをめいっぱい活用しながら、インタラクティブを活性化した授業をしたいと思っています。そのために、コミュニケーションの壁となる机を取り払い、いすだけ、あるいはいすも取り払って床に座らせて授業をします。17~18人なので、教師のまわりに生徒が半円形に並んだとき、すぐ手の届くところに全員の顔が見えます。生徒の集中力も高まりますし、生徒同士お互いに全員の顔が見えるということが、コミュニケーションを活性化させる大きな要因ではないかと思っています。このほかにも、2列に向かい合わせたり、グループに分かれたり、いろいろな形態を随時取り入れてコミュニケーション活動に取り組んでいます。40人のクラス・サイズでは、なかなかこんなに自由に形態を組み替える

ことはできないだろうと思えます。

**高橋** 少人数制を取り入れることによって、空間活用の自由度がどれだけ高まるか、また生徒のインタラクティブの量や質がどれだけ変わるかということを示唆していますね。特に授業が質的に変わる可能性があるという認識が大切であると感じました。

**金井** 先生方の研究に大変感服し、敬意を表したいと思います。教室空間の使い方については、なぜ今まで気づけなかったのだろうと思いました。今後ぜひ取り入れたいと思います。

今後の課題として考えているのは、発展的な教材や活動です。基礎コースの教材はイメージしやすいのですが、発展コースをさらに伸ばすための教材となると、なかなか思いつきません。栃木県では、発展的な学習に関する指導事例集というものを教育委員会が作成してくださったので大変参考になっていますが、これからも研究が必要であると感じています。

現在の指導要領では、関係代名詞は表現の能力までは求めないということになっていますが、先日発展コースの生徒にやらせてみたところ、思ったよりもできました。“Who am I?”のゲームの中で、“I have a friend who likes ...”などという文を使って友だちを紹介する活動ですが、発展的な指導として十分可能であると感じました。そして、一斉授業の時に、発展コースの生徒が発問する形で、クラス全体でゲームに参加したのですが、授業が活性化しました。エン

少人数授業を考える

カウンター的な発想で、生徒のよいところを見つけていることを目的とした授業実践です。

**高梨** 今回ご参加の3人の先生方の報告を伺って、少人数指導が中学校現場に着実に根付きつつあるという印象を受けました。

関口先生の座席配置とインタラ

クションに関する着眼点は大変ユニークです。伊地知先生のおっしゃる山の登り方の話のように、学習方法は一人ひとり違うのだから、「個」において初めて学習が成立するものだという認識も非常に大切です。また金井先生の報告にあるように、発展学習の実践例

をシェアするということも必要でしょう。どんな領域に重点を置いて発展させるのかということも、生徒の実態に合わせて考える必要があるでしょう。

いずれにしても、大変素晴らしい実践報告を聞いて、ある意味で安堵しています。

少人数ならではの活動と評価

**高橋** もうすでにいくつかの具体的な例を紹介していただきましたが、ここで改めて、少人数授業をするにあたって「こんな活動をするよ」「こんな観点で活動を考えたらよ」といったアドバイスをお話していただきたいと思えます。また教材についても工夫などがあれば伺いたいと思えます。少人数だからこそ可能な活動、少人数の利点を最大限に生かした活動という点で、心得のようなものが見えてくればと思うのですが。

**伊地知** 基本的なことですが、音読の指導にしても、少人数ならば生徒を教室の前に出でこさせ、Read & Look up をやらせることができます。全員を指名することも時間的にやりやすくなります。教師と生徒、あるいは生徒同士のインタラクションも増え、質問しやすいつか、何回も当たるとか、そういうことが生徒に「きちんと見てもらっている」という信頼感を持たせるようです。

**関口** 少人数授業ではアットホームな雰囲気作れるので、気軽に取り組める活動という観点が大事だと思っています。生徒のアンケートを見ても、40人学級では

発言できなかったことが少人数になって言えた、という意見が多く見られました。

音読にしても、40人で一斉指導だと「自分が関わらなくても進んでしまう」という面がありました。少人数で生徒を円形に並ばせて音読させると、やはりそこに関わらないわけにはいかないような状況が作れます。みんなが関わり合い、感じ合い、そして一体感を生むというような活動を取り入れたいと思っています。

**金井** 少人数あるいはT-T指導を取り入れるようになって、評価の面でも変化がありました。先ほどの話にもありましたが、面接法による評価が可能になりましたし、また作文指導でも、授業時間内に添削してすぐに返却することもできます。このような変化は大きいと思います。個に応じた指導がやりやすくなりました。

**高橋** 少人数制の評価には、いろいろ難しい点もあると聞いています。評価についての工夫、あるいは問題点があれば、ここで伺えればと思います。

**金井** 少人数制にとっては、評価が課題であると実感しています。

担当教員が指導計画と同時に評価計画も合わせる必要があります。習熟度別に分かれたクラスの場合でも、同じ活動をするのであれば、評価規準は同じでなくてはならないと思いますので、担当教員間の打ち合わせが重要となります。なかなか時間を確保することが難しいのですが、この2年間の取り組みの中で、少しずつ効率的に打ち合わせを行い、歩調を合わせられるようになってきました。

**関口** 私も担当者同士の打ち合わせが重要だと感じています。同じ学年を担当している教員でも、なかなか同じ授業展開をすることは難しいので、最低限ここだけは合わせようという部分を先に決めておく必要があると思います。

本校では生徒に「自己評価表」を持たせていますが、そこにはその学期に行う言語活動がすべて書き込まれています。これらの活動については、評定につながるので、きちんと教員間で打ち合わせをして、各クラスの足並みをそろえるようにしています。それ以外の部分については、各集団の特長や教員の個性を生かした授業展開が可能ということです。



IJICHI YOSHINOBU



KANAI MUTSUMI



SEKIGUCHI KAZUHIRO



TAKAMASHI TSUNEKO



TAKAHASHI SADAO



生徒にとっても、言語活動が事前に示されていると、学習の見通しを持ちやすいですし、教員からの評価と自己評価をつき合わせて話し合うこともできますので、メリットは大きいと思います。

**高橋** 評価で大切なのは、「生徒が納得できる評価である」ということだと思います。その意味で優れた実践ですね。

**伊地知** 本校でも、習熟度別に分かれてはいますが、担当教員間で協力し合い、定期テストや小テストは共通のものを使っています。また、自己紹介やスピーチなどの発表活動を行うときには、準備はそれぞれ別々に進めながらも、発表のときには両コース合同で行うようにしています。

**高梨** 習熟度別の編成に批判的な人たちは、「生徒間の差がますますひろく」ことを理由としてあげようのですが、私は必ずしもそうではないと考えています。発展コースの生徒について言えば、従来の指導では、あたかも天井が低くて生徒の伸びを妨げていたような部分がありました。習熟度別によってその天井をとっばらうようなことになるわけですから、生徒の資質によって大いに伸びる可能性があるわけです。確かに、生徒間の差を一本のものさしで測れば、差が大きくなることもあるでしょう。しかし、少人数・習熟度

別指導の一番の狙いは、「基礎・基本をできるだけすべての生徒に定着させたい」ということ、つまり英語教育の「底上げ」であると思います。この「底上げ」がなされている限りにおいては、上位の生徒がさらに伸びていくこと自体を問題視する必要はないのではないでしょうか。学力に差がつくことをすなわち「悪」と考えるのではなく、伸びる可能性のある生徒は伸ばし、一方で従来の指導では目が行き届かなかった生徒にも基礎・基本を身につけさせることができる、そういった意味での底上げができていくことが大切だと考えています。

少人数・習熟度別指導は決して万能薬ではなく、文部科学省の表現を借りて言えば「引き出しのひとつだ」ということです。生徒を指導する上では、教師の側にいろいろな引き出しがあってよいと思います。先生方の話にもあったように、様々なタイプの生徒が混在したクラスのほうがバランスがとれてよいという考え方も引き出しのひとつです。ただ、従来の一斉指導では、どうしても配慮が十分に行き届かない生徒がいるということ、その一方で退屈してしまう生徒もいるということを考え、両者の不満をできるだけ少なくするということが、少人数・習熟度別指導のメリットであると言えるの

## PROFILE



高梨庸雄

京都ノートルダム女子大学大学院教授。専門は英語教育学。目下の関心事は「評価」（特に、生徒の英語力並びに教師の英語力・指導力）。著書は『英語リーディング事典』、『教室英語活用事典』、『英語コミュニケーションの指導』（以上、研究社）など多数。近刊に『英語の「授業力」を高めるために』（三省堂）がある。

ではないでしょうか。

評価を考える上で、担当教員間の差が問題となるようですが、教え方の個人差が出るのはある意味当然のことです。あまり細かいところまで合わせようとする、窮屈になりますし、教員の個性のよい面までつぶすことにもなってしまいかねません。本日は「ここだけは合わせよう」という部分を決めておくという工夫の例をいくつか教えていただきました。そうした共通化を図った部分で評価を行うということが、この問題へのひとつの答えではないでしょうか。

## 今後の課題

**高橋** 少人数を生かした授業展開や評価の問題について出していますが、そのほかの課題と

してはどんなことが挙げられるでしょうか。

**高梨** 今後の課題として挙げられ

るのは、少人数に分けて授業を行うことに対して生徒や保護者が抱いているある種の不安です。例え

## 少人数授業を考える

IJICHI  
YOSHINOBUKANAI  
MUTSUOMISEKIGUCHI  
KAZUHIROTAKAMASHI  
TSUNEOTAKAHASHI  
SADAO

ば「他のグループでどんなことをやっているのか気になる」ですとか、「グループ分けせずに、いろいろな考え方の人がいるクラスで勉強したい（させたい）」などという意見がアンケートでも多数出ています。このような心理的な抵抗を和らげるためにも、保護者会などの機会を見つけて、少人数・習熟度別のねらいやメリットについて丁寧に説明し、理解してもらう必要があるでしょう。

**金井** 運用面から見ると、施設や教材・教具が足りるかどうかという問題があります。それから、教員一人ひとりの持ち時数の検討や、弾力的なカリキュラムの検討も必要です。

情緒面での不安については、やはり他のクラスが気になるということはあるようです。そこで、印刷物を配布するとき、裏面に他クラスの内容を載せておくなどの工夫をしています。

何よりも大切なのは、何のために少人数指導をしているのかということを生徒にしっかりと伝えることだと思います。「君たちにできるようになってほしいからやっているんだよ」という目的を、生徒にしっかりと伝えることです。そうすれば、生徒の口から各家庭にも伝わるようになるでしょう。

**関口** カリキュラムとの関係では、一斉授業と少人数指導の混在に苦労するという話を聞きます。例えば月曜と水曜は一斉授業、金曜は少人数指導ということになると、ちょうど金曜日に少人数指導に適した活動が来るような工夫が必要ですし、また月曜には一斉指

導に戻れるように、各グループの授業内容を揃えなければなりません。カリキュラムの中での少人数指導の適切な位置付けが必要になってくると思います。

**伊地知** 東京都が採用している2クラスを3グループに分けるといふ方式には、様々な運用上の問題があると聞いています。どうしても中位のグループに人気が集まり、生徒数が30人以上になってしまうようなこともあるようです。時間割をつくる上でも、専任教員2人に講師1人が完全に固定してしまうわけですし、教室が足りない場合には体育で空いている教室を使ったりなどの話も聞きます。

習熟度別編成には、ほとんどのケースで生徒の希望が加味されていると思いますが、学力的には下位グループのほうが合っていると思われる生徒が上位グループでがんばろうとしている場合、やる気があるのはけっこうなのですが、学習効果を考えると疑問に思うこともあります。

少人数になることで、個人的に最も気になるのは、自分が授業を担当していない生徒の存在です。以前は全校の生徒を教えていたので、全体を把握することができたのですが、少人数となると教えない生徒も出てきます。途中でコースの担当者を変えることも考えましたが、これは山登りの途中で先導者が変わるようなものなので、学習法についての混乱が生じるなど、別の問題が発生するのではないかとこの恐れがあります。よって現在は担当を固定しています。

今後の話ですが、担当教員の得意分野や興味・関心を生かしたコース編成ができればおもしろいと思います。例えばリスニング・インプット中心の先生と、教科書や文型中心の先生などで担当コースを分けるような形ですね。ALTとJTEで考えるとわかりやすいかもしれません。表現の観点での習熟度も考えられます。

**高橋** 教師の資質を活かした少人数指導ということも、今後はあり得るかもしれないですね。

**関口** 小学校での英語教育の動きが気になります。現在は、中学1年生は基本的にみな同じスタートラインに立って英語の学習を始めるわけですが、数学の場合、小学校の算数ですでに興味・関心や理解に差がついた状態で入学してきます。すでに同じスタートラインではないのです。小学校での英語教育が、中学校の学習への架け橋として、プラスに作用してくれることを願っています。

**高橋** 本日は、冒頭の「わかる授業で基礎学力の向上を」という話に始まり、確かな学力を保证するための取り組みのひとつとしての少人数指導について、お話を伺ってまいりました。少人数指導の現状を把握し、具体的な実践をふまえての様々なアイディアや問題点を交換し合うことができたと思います。出された問題点や課題は、これで解決というわけではありませんので、さらなる実践研究を続けてゆければと思います。ありがとうございました。